日本で見られるツルたち

世界には15種類のツルが生息していますが、日本ではタンチョウの他にナベヅル、マナヅルなど計6種類のツルが冬鳥として大陸から鹿児島県出水市などにやってきます。1年を通して日本で暮らすのは基本的にはタンチョウだけです。

ナベヅル

マナヅル

アネハヅル

カナダヅル

クロヅル

ソデグロヅル

(写真提供：出水市ツル博物館クレインパークいずみ)

国の特別天然記念物 ～タンチョウ～

天然記念物とは学術上の価値が高い動物、植物、鉱物、それらの存在する地域でその保護や保存を指定されているものです。特に天然記念物の中でも国際的に価値の高いものは特別天然記念物と呼ばれます。

タンチョウは1952年に「釧路のタンチョウ」として特別天然記念物に指定されました。この際には、タンチョウだけでなくタンチョウの繁殖地（釧路）も含めて指定されましたが、1967年には地域を定めず、日本にいるタンチョウは全て特別天然記念物として指定されています。

阿寒湖のマリモ

(写真提供：阿寒湖畔エコミュージアムセンターマリモ研究室)

大雪山

(写真提供：環境省 上川自然保護官事務所)

北海道の特別天然記念物

阿寒湖のマリモ・野幌原始林・大雪山

なども指定されています。

タンチョウの保護活動と今後について

タンチョウは、人による乱獲や、生息地の開発等により、明治時代に急激に生息数が減少してしまいました。大正時代に入ってからは絶滅してしまったと考えられていましたが、大正時代の終わりに釧路湿原で細々と暮らしているタンチョウが十数羽発見されました。

そこで、タンチョウの生息数を増やし絶滅を防ぐために、タンチョウの保護活動が始まりました。具体的には、狩猟を禁じる法律の整備が進められたり、釧路周辺で人によるタンチョウへの給餌が始まったことなどが挙げられます。

こうした取り組みによって、近年では生息数も回復してきました。

しかし、冬の間は、完全に人からの給餌に依存しているため、人による給餌を止めると一気に生息数は減ってしまうと言われています。

そのため、将来的にタンチョウが人に頼ることなく生活できるように、給餌量を少しずつ減らしながら、冬の間でも自力で餌を採ることができるような環境の整備が進められています。

その他にも、生息数が増えてきたことに伴って、電車や電線に絡まっての事故死の増加や、農作物が荒らされる被害の増加などの問題も発生しています。

今後、タンチョウと人間が適切な距離を保ちながら共生していくには、まだまだ課題がたくさんあります。

給餌の様子（写真提供：阿寒国際ツルセンター）

昔は東京でもタンチョウを見ることができた!?

現在は、北海道の道東周辺でしか見ることができないタンチョウですが、江戸時代以前は東京でも見ることができ、皆から愛される鳥でした。しかし、明治時代に入り、人が食べたり、羽で加工品を作るために乱獲されたりしたことなどが原因で、東京からはその姿を消してしまいました。

近年の保護活動により、北海道には1,300羽近くのタンチョウが暮らすようになりましたが、生息地が一か所に集中することによって、鳥インフルエンザ等のような感染力の強い感染症が発生した際に、一度に広がってしまうリスクもあります。

このため、生息数を増やすだけでなく、その生息地を拡大していくことも、今後の課題の一つになっています。